

われらの「食口」、荒木先生

金牡丹（筑波大学非常勤講師）

韓国では、家族のことを「食口」（シック）とも言う。「家族」の条件が婚姻や血縁による関係性に求められるとするなら、「食口」の定義は至って簡単で、食事を共にする人たちのことを指す。そのために「食口」は、基本的には同じ家に住み、食事を共にする家族のことを指すが、比喩的には同じ会社や組織に属する同僚たちを指すこともある。要は、同じものを一緒に食べていればそれでいいということ。荒木先生のお言葉を借りれば、至って「地上的」な条件によって構成される集団が、「食口」なのだ。

荒木先生に出会ってから、もう7年の月日が経った。その間、どれだけの食を、私は先生と共にしてきただろうか。筑波に着いたばかりの研究生時代、学内のレストランで先生に初めて食事をご馳走になった時のことを、私はよく覚えている。それ以来、大学近くで、土浦で、上野で、そして海を渡って遠くオーストラリアでも、荒木先生との食事は私にとって、いつもこの上なく楽しい時間であった。それは、先生のグルメ的な感覚とともに、世間話を装ったさりげないご指導（あるいは、その逆かも知れないが）のおかげだったと思う。先生はいつも総合文学の愉快的食事会・飲み会の中心であり、こうした時間は私たち学生にとって、先生の授業や読書会と同じかそれ以上に大事な時間であった。荒木先生が総合文学の学生たちに尊敬され、親しまれたのは、研究者としての広い知見や鋭い洞察はもちろんのこと、このように食を共にする人としての、つまり「食口」としての先生の魅力によることだと、私は思う。学生が何かの理由で意気消沈している様子を見ると、先生は何も言わず、食事に誘ってくださったりする。「たくさん食べて」という一言に込められた大きな愛情が限りなくありがたかったのは、一度や二度ではない。

先生は総合文学という研究共同体を、先生の「食口」としてみなし、そのように私たちに接してくださったのかも知れない。振り返ってみれば、先生はいつも何かしらの食べ物を学生たちに配っていた。お米、お酒、お菓子、お母様の海苔巻きまで。そういえば、「腸詰」如きの「地上的」なものに取り付かれてしまう文学研究者も珍しいけど、公民館の調理室を借りて学生たちと「腸詰」を食べる会をやってしまう研究者もそうはいないのではないだろうか。

筑波を離れた今、先生の授業や読書会での指導は受けられないが、まだ先生と食を共にする楽しさが残っていると思うと、それだけでも私はなんだか救われるような気がする。そして、いつか私が先生と呼ばれるようになったときに、荒木先生のように、学生にとって魅力的な「食口」でありたいと切実に願う。そのためには、まだまだ修業が足りないようだから、もうしばらくはご馳走になりながら、勉強させてもらわなくちゃ。先生、また取手の珈琲屋に連れて行ってください！